

## 先達の方々 屯田兵(その5)

### 屯田兵の入地

#### 応募の動機

屯田兵に応募し、北辺の北海道に移住するということは、当人は勿論家族にとっても極めて重大なことであり、相当な覚悟が必要でした。屯田兵岩崎猶蔵氏(兵村一区、福井県)は、「・・・耕地が少なく農業に見込みがなかったので、・・・それで北海道へ屯田で行くという話が出て、それで来たわけです」と、開基七〇年を迎えた昭和四一年、當時を回想し語っています

応募の動機は、裏面に記載したようにそれぞれに理由がありますが、第一に広大な土地に魅力があったこと、第二に新天地への夢と希望によるものに大別できます。

#### 船旅で新天地に

明治三〇(一八九七)年六月二日午前六時頃、野付牛屯田(端野、北見、相内)各兵村に入地する第一陣おおよそ二〇〇戸の屯田兵とその家族を乗せて武揚丸が、雨天

の網走港に入港しました。五月十九日、愛知県の武豊港を出航し、神戸、宇品、門司、敦賀、宍戸に寄港し、西日本からの応募者を乗船させ、津軽海峡からオホーツク海に入り網走まで半月にわたる船旅でした。第二陣は、武州丸が六月一日、北陸、東北地方からの応募者を乗せ、新潟、青森、小樽を経由し網走に入港したのは六月八日でした。

翌三一(一八九八)年の移住は、八月以降にずれこみ、第一陣が八月三十一日、第二陣が秋風の吹く九月一日に網走に上陸しました。

この二年間で野付牛屯田各兵村に移住した屯田兵は、三〇年が二九八戸、一五三一人、三二年が一九九戸、一三二三人でした。なお、第一中隊下野付牛(端野)に入植した屯田戸数は、三〇年に一区三三戸、二区三四戸、三区三三戸の一〇〇戸、三一年には一区三一戸、二区三六戸、三区三三戸の一〇〇戸で合計二〇〇戸が移住しました。

#### 端野をめざして

明治三〇年六月二日、武揚丸で網走に上陸した端野兵村に入植する第一陣六四戸(おおよそ四二〇人)は、肝心の兵屋が未完成のため、網走の寺院や漁場の番屋などに分宿し、端野に向かったのは六月七日の未明のことでした。大きな荷物は馬で運ばれ

ましたが、人々は川蒸気船が曳航する小舟に分乗し網走川をさかのぼり、網走湖を横断し、中央道路の一号駅通から老若男女一団となって徒歩で約六里(約二五km)の道の端野兵村に向かいました。六月というのに草木は芽を吹きはじめたばかりで、遠い山々には残雪が見られる中、陽が裏山に傾きかける午後五時頃、全員が端野一区兵村に着き、二区、三区兵村の方もまだ明るさの残るうちに、全員が無事に各兵屋に到着しました。

しかし、密林や草原の中の一軒屋に等しい兵屋は未完成で、中には屋根板だけがふかれた兵屋もあり、ただ、呆然とする方もいたと言われています。

「兵屋の中はかんな屑と板切れが散らばっており、土間ははじめにいた。太古の大地そのままの凹凸した庭に夜の焚火を燃やしたのであるが、家族一同無言、旅疲れの頬を火明かりに照らしながら、其の胸に去来したるものは、果たして如何なる感懐であったであろうか。後人の窺い得ない深刻なものがあつたのである。家近くに鼻が鳴いて、その夜は誰も一晚寝なかつた。」と、端野町史に記されています。

(裏面に続きます)

田中 誠

### ◇屯田兵応募の動機

屯田兵齊藤伊兵衛(二区・埼玉県出身)は、  
 ……そうすな、国を出るときにはあまり特別なこともなかったですが、とにかく歳も若いんだし好奇心半分で、初めてのところだから行ってみようよと、まあこんな気持ちだったですな。

屯田兵竹中善吉(三区・岐阜県出身)は、  
 岐阜というところは至って耕地が少なく、人が多いところでありますから、北海道へ来て五町歩の土地をもらい、そうすると土地を沢山つくることのできるから、これはよいところであるというような考えで、屯田を志願して北海道へまいりました。

### ◇船旅で

屯田兵岩崎猶蔵(一区・福井県出身)は、その時の状況を、  
 ……乗船したのは武陽(揚)丸の第二便で、野付牛屯田兵村のみであった。武陽丸は比較的順調な航海を続けたのだが、敦賀から網走迄十五日間を要した。経験のない女、子供等は、長い航海のため船酔に悩まされ、病人同様となり、やつと粥をすって体を持ちこたえろといった状態であった。船の生活は半月に涉つたため、途中出産するという騒ぎも起つた。何せ船の中のこと、産婆は勿論取上げた経験者がないために、軍医がこれに代り、後始末は適当な女の人が済ませた。生まれたのは女の子で、無事の出産と長途の平安ということにあやかかって、船長が「安子」と命名した。

### ◇新天地で

一中隊一区に入地した瀨瀬徳次郎は、  
 ……それで十賊原を踏み分けて、自分の兵屋のあるところに行きましたが、屋根は半分でありました。土間となるべきところが三尺五寸六寸もある十賊原でありまして、その中にありました大木を伐り出して兵屋を建てたと見えまして、木の株が飯台となつて、兵屋ができるまで飯台に利用したような有様でありました。……なにしろお月さんも、お星さんも、ともに見て暮した晩が大部あつたんでございます。

### ◇端野屯田

屯田兵奥田乙松(二区・福井県出身)は、  
 私は福井県で三一年にここに入りました。三〇年の三四戸がもう入つていまして、私達は所謂新兵の方です。一区には六四戸、二区には七〇戸、三区六六戸でした。敦賀まで汽車がついたばかりでそれで出て、そこから船に乗りました。国では農業をしていましたが、家が貧しいものですから、力一杯はたらく面積もありませんで、兄が木炭を焼いていました。

こちらへ来ることは親が志願しましたが、その頃ですから松前なんか行ったら、もう生きて会えんといつて反対もありました。それで三年たったら一度戻るからと言ひましてね、今でいうと南米へ行くよりもおそろしいような気がしましてね。何しろ寒いところで、小便一本一本凍るから、それを束にして売買するんだなんて話を聞いてましたからね。私の方も雪は降りますが、雪が降っても素足にワラジだけで歩けるとこですから、ツマゴというのもありましたが、よほど深くつもったときです。

### 郵送船経路図

